国　語　科

国語科における文学教育について

酒　井　為　久

I　公開シンポジウムの準備

名古屋大学国語国文学会の主催するシンポジウムのテーマに，国語教育が取り上げられたのは，今度が最初である。名古屋大学文学部文学科国文学専攻の卒業生のうち，高等学校の教職に就いた者が相当数に上ることから，専門の国語国文学研究に加えて，これからは国語教育研究の方も積極的に推進していきたいという学会の判断である。その結果，主題を「教材研究と文学研究」とする公開シンポジウムの行われることが決った。

準備会が召集される段取りになり，高校の現職国語教諭が参加して，企画が具体化し始めた。まず問題になったのは，主題と教育現場の問題意識とが直接的なつながりを持ちにくいのではないかという点である。

確かに，国語科における文学教育を文学教材の教材研究に置き換えうる伝統的な見方に立てば，主題の意味するものは，文学教育の核心に迫る重みがあると言えるように思う。ところが，現在の高校教育は準義務教育となり，文学教育を小学校や中学校におけるように言語活動の一領域とする扱いが，むしろ実態に合うようになっている面がある。

以上に要約したような討議の後，副題として「低学力生徒・国語ぎらいの生徒の指導のために」を付けることが決った。続いて，提言内容の検討等を議題とする会合が持たれた。

準備会の開催は，次のようであった。

〈第1回〉　55年12月1日
　出席　山下宏明　（名古屋大）
　　武山隆昭　（椙山女学園大）
　　安藤重和　（愛知教育大）
　　中井孝子　（大分高）
　　酒井為久　（名古屋大附高）

〈第2回〉　56年1月12日
　出席　上記の5名に加えて，次の2名。
　　市川光彦　（岡崎東高）
　　藤掛和美　（豊田高専）

〈第3回〉　56年3月3日
　出席　上記した7名。

準備会は，3回で切り上げ，56年4月から5月にかけて，シンポジウムの当事者同志が各自の国語教育研究資料を交換し合い，事前に各自で検討しておくことになった。打ち合せに従い，次の資料を相互に交換した。

〈藤掛和美〉　「雨ニモマケズ」試論――主題の分裂について――
　　国語教育における文学作品の主題――「物くさ太郎」を例にして――
　　「学習者」の認識過程――「学習者論」に立つ「わかる国語の授業」の創造――

〈中井孝子〉　「書くこと」を中心とした現代国語の指導の試み
　　安部公房「棒」と抽象思考

〈市川光彦〉　古典学習指導上の留意点――「伊勢物

〈資料1〉学会事務局作成の案内ポスター

昭和五十六年度　名古屋大学国語国文学会
公開シンポジウム

日　時　七月四日(土)午後二時より
場　所　名古屋大学文学部第一講義室
テーマ　教材研究と文学研究
　―低学力生徒・国語ぎらいの生徒の指導のために―

学習者にせまる教材研究　藤掛和美氏（豊田高専）
安部公房「棒」の指導実践から　中井孝子氏（大分高）
芭蕉教材の取り上げ方　市川光彦氏（岡崎東高）
司　会　酒井為久氏（名大附高）

語」の第9段八橋を中心として――
「古典」としての芭蕉の学習指導――
発句（後期）の読解鑑賞の視点――
〈酒井為久〉　読書感想文指導からみた国語科教育の二三の問題
文学教材の教材研究について

以上である。そして，56年6月27日を提言発表要旨の提出期限とした。

Ⅱ　開催当日の司会

昭和56年7月4日（土）午後，名大文学部第一講義室の会場に約百名の参会者が集った。

司会酒井為久（名大附高）が，当日のシンポジウムで発言した内容を順にまとめると，次のようである。

(1)　冒頭部分の要所

国語科の教材は，広い範囲にわたっていますが，本日は文学教材に限定しその教材研究と考えていただいた方が，わかりやすいかと思われます。それも，高校の文学教材でありまして，もちろん古典もその中に含まれます。そうした文学作品教材を研究しますとき，私が心がけているポイントを申し上げます。

現代文学作品教材を扱う場合は，その教材のどの点までを授業で扱うかという問題です。どこらまで学習指導したら授業を終えるかという問題です。

詩の授業を終えた後で生徒に書かせた感想文を，次のような三つの類型に分けています。

1. 低型　生徒中心的　生徒の体験やそれに基づく思考の範囲内だけで処理した感想文。
2. 中型　内容把握的　純粋な言語表現を手がかりとして詩の内容を正しく味わった感想文。
3. 高型　作者理解的　詩を作った人間の心情や生き方の理解の上に立った感想文。

この三類型を目安として，詩の授業の目標を定め，授業の終着点を決めるのが私の方法です。

そうした授業の経験から，次のような詩教材観が確立したように思います。

1. 生徒の体験や思考の範囲内に納まる可能性がある詩。
2. 詩特有な言語の使用方法があり読解に相応の難度がある詩。
3. 詩人の心情や生き方をより多く反映している詩。

を発掘する研究が，私にとっての文学研究といえるのではないかと考えます。

(2)　提言三氏の発表後（90分経過）

三氏の提言発表には，文学作品教材内容や表現を，どうやって生徒にわからせるかという観点からのお話しがありました。そういう点で，私も心がけていることを述べますと，古典文学作品教材の扱いに際しては，教材への導入段階，広く言えば入門期の指導が勝負だといえます。

これは，いかに早く一定の水準まで生徒を引き上げるかということで，国語ぎらいの生徒をなくしていこうとしています。低学力生徒の発生を未然に防ぐことができるかという問題だろうと思います。

(3)　質疑応答の途中（130分経過）

次年度，57年度から新教育課程による高校教育が始まります。「国語Ⅰ」は中学4年的内容であろうといわれますが，丁度，その新教科書が出そろったところで，タイムリーなシンポジウムであります。武山隆昭さんがその全教科書を調査して下さって，資料を作ってお渡ししてありますので，それについて武山さんから説明していただきます。

(4)　終結部分の要所（150分経過）

本日の問題は，結論を出す，あるいは結論が出せるという問題ではないので，討議の内容を参考にしていただいて皆さん各自の文学教育を創っていただきたいと思います。最後に，提言の三氏に，そのご経験を通して，面白い国語の授業を成立させる最も重要な条件と考えられているものは何か，面白いというのは本質的に生徒をひき付けるというようなことですが，それについてお話しいただいて，結びにしたいと思います。

以上のような次第である。

次に，提言者の提言内容の要点だけを簡単にまとめておきたい。

(1)　学習者にせまる教材研究

藤掛和美氏（豊田高専）

教材というものは，授業で使用して始めて教材となりうるものである。いわば，機能である。従って，教材研究は，作品研究と指導研究との統一によって成り立っている。

そこで，教材としての文学作品を如何に研究するかという問題である。文学作品もまた，読者の読むという行為により存在価値が発揮されると考える。

読んでわかるということは，「表現主体が主観的に切り取った現象の一断面の中で表現しようとする意味概念を，理解主体が，その切り捨てられた現象について表現主体と共有感覚を持ち，その意味概念についてあらかじめ知識や経験の共有感覚を持っている場合に成立していく。そして，理解主体は表現主体が意図するそれらの意味概念を，己れの実体感覚の中に組み込み，イメージ化をはたしながら，新たに己れの意味概念を形成していくことにより理解行為が完了する。」ことである。

その核となる主題として，原主題・私主題・公主題の三つを考えている。教授者は公主題をもつべきであり，学習者はまず私主題をもつことが必要であり，授

業では学習者の私主題を公主題へ近づける読みをすることになる。

学習者にせまる教材研究とは，教授者の公主題の確立による教材の授業化に始まり，学習者との共有感覚を現実の状況に求めて具体化をはかり，学習者に学習者の私主題を生じさせるようにすることである。

(2) 安部公房「棒」の指導実践から

中井孝子氏（大分高）

教材分析と教授法と生徒の言語能力の分析の三つの観点からの研究が大切である。従前の高い言語能力をもつ高校生に対する文学教育であるならば，教材分析を深める授業を想定すれば十分であった。

ところで，実業高校の生徒のように，従来の基準で考えるより低学力で多様な生徒に対する教材研究は，生徒の言語能力を分析する深い洞察力の上に立って，教材分析をし，教授法を練る必要が生じてきている。

言語能力を，思考力と深いかかわりを持つ内言との関係で概観すると，「言語そのものの力不足により内言の力がほとんどない」「ある程度の言語力はあるが十分でないために内言の力も未発達」「基礎的な言語力が完成されているため内言が発達している」というようである。

安部公房「棒」は，変形する登場人物の様子や作品の抽象的な寓意性からいって，内言が発達している生徒向きの教材である。提言者が担当した，内言の力が未発達の生徒と，思考法の上から言えば，接点の乏しい教材である。

この作品のもつ抽象性を現実のものと結びつけて理解させるために，講義による絵解きでは表層的な読みしかできないと考え，主人公の生活を具体的に記述させるという，書くことの指導を通した実践を行った。

その結果，生活感あふれる「棒」の学習指導ができた実例を報告し，同時に，書くことの徹底した指導の繰り返しが，生徒の内言の力を発達させ，抽象思考へ高めえたのではないかと考えている。

(3) 芭蕉教材の取り上げ方

市川光彦氏（岡崎東高）

古典嫌いの生徒の増加の原因が，生徒自身の学力不足や意欲欠如にあるとはいうものの，もう一つ，指導教師の勉強不足にも存する点を大いに反省する必要がある。

そこで，生徒の実態に即した適切なる教材選びと，彼らの状況に完全に対応しうる幅広い教材研究とが不可欠となる。たまたま取り扱った芭蕉関係教材に対する生徒の反応がアンケート調査では良好であった。

「芭蕉の取り上げは，発句に始まり発句に終わるとしてよかろうと思う。導入時ですぐれた鑑賞文を読むと，一応の目安が与えられるため有効である。また，郷土関係句，近在句碑などの紹介も興味づけとして役立つ。取り上げる句は生徒たち自らの手で探させたいし，グループ学習活動と各自か鑑賞文を書くこととをきちんとやることを眼目としたい。」

「発句に続いて，奥の細道や去来抄を取り上げる。予習を学校でやらせたり，通釈の確認も行うが，まとめと鑑賞がポイントとなる。思い切って，文法離れの時間をつくるといい。終結としては，芭蕉についての作文を書かせる。」

このような古典指導の方法を確立するためには，古典作品の文学的研究を深めておくことが前提となる。

古典のおもしろさ，古典授業の楽しさは，芭蕉関係教材の場合はその俳諧性を厳しく適切に教え込むことから生まれる。

古典の授業の担当教師は安易感を持ちやすいが，それがよくないと思う。

以上のように，藤掛氏は主として作品の問題，中井氏は主として生徒の問題，市川氏は主として教師の問題について，それぞれ25分～30分程度の提言発表があった。

次に，参会者の中から出た質問のうち，主なものの要点だけ記しておこう。

(1) 「主題について，具体的に示してほしいが，公主題というものは存在するのだろうか。」

(2) 「教材で何を教えるか，経験的には理解できるが，ことばをわかる段階と表現内容の学習指導とのかかわりが今一つ明確にならないのではなかろうか。」

(3) 「言語を通した理解という過程の上に，文学の読みが成立するという前提条件を共通認識にしなければ文学教育は成立しないと思うがどうか。」

以上である。他に，時間の関係があり，司会者が代理する形で質問する場面もあった。質問に対する応答は省略する。

次に，当日配布された資料を列挙しておく。

「シンポジウム・レジュメ」

「言語能力と思考力との関係試案および棒に関する生徒作文」

「芭蕉教材の取り上げ方」

「司会用資料」

「高等学校国語Ⅰ教科書13社17種ジャンル別比較」

以上の中で，武山隆昭氏作成の新教科書調査結果のものを，〈資料3〉として掲げておく。

Ⅲ　話し合われた内容

文学作品教材かわかること，生徒にわからせることの原理や問題点や方法が，主として話し合われた内容

である。

終結にあたって，司会者が授業の面白さの要因は何かという質問を出した時，提言三氏の答えは次のようであった。即，生徒を動かすことができた授業ではなかろうか。生徒を向上させることができた授業ではなかろうか。生徒を向上させることができる授業で先生の人間性も十分発揮される授業である。わかったという手ごたえと為になったという満足感が残り，次の授業への意欲がわくような授業である。

答えのいずれもが，授業内容がよくわかることにより，生徒自身が変革していく授業が面白い授業であるとしていた。これは，藤掛氏が生徒の私主題をまず育てるような文学作品教材研究を主張されたこと，中井氏が書くことにより生徒の内言の発達をはかり抽象的文学作品教材の理解へ導いたこと，市川氏が生徒の古典文学作品教材に対する興味関心を高める各種方法を考案したこと，を要約し象徴的に表現したものと言いうる。

小学校から中学校，そして高等学校へと基礎から積み上げる方向で文学作品教材の教材研究をすること。そうすれば，言語活動能力の学習指導に重点が置かれて，文学教育は言語教育の一つの領域であるとみなすのが自然であるが，そういう文学教育観をせざるをえない状況が現在の高等学校には存在している，という共通認識の表れであろう。

もともとわかるはずの生徒を対象とする文学教育でなくなっている。それだけに，わかってもらうための工夫や情熱が必要になっている。事前の教材研究が授業研究の色彩を帯びる度合いが濃くなってきた。

わかりのよい生徒を対象とする，従来からの高校の文学教育は，文学作品の読解の手順に従って鑑賞を深める授業であって，作品分析を徹底した教材研究の過程そのものを授業に置きかえるものである。そこにおいては，作品ごとの文学的研究の如何が問題であり，そういう文学教育観も有力である。

会の終了後に行われた懇談会で，恩師松村博司博士が大学における文学教育を念頭におかれたと思われるのだが，教材の作品研究を十分にすることがそのまま授業の面白さになる，と発言されていた。そういう研究的文学教育の入門時期として，高校の文学教育を位置付ける行き方が普通であった頃がある。現在は，この行き方についていけない，わかりのよくない生徒が高校へ進学する時代である。

そこで，私が今回のシンポジウムによせた最も大きな期待は，準義務教育化した現代の高校国語教育に対応する，新しいまとまりのある文学教育観を見い出したいということであった。

結果として，シンポジウムが終ってから思ったことは，一つのすばらしい文学教育観を求めること，そして，その一つの文学教育観に固執すること，が今の高校教育にはそぐわないということである。

シンポジウムでは，互いに共通するものを現象面では認め合いながら，本質的な文学教育観とでもいう表面に出ない根本の考えについては，互いに相違するものを感じ合っていたようである。

わからない生徒をわかるようにする工夫や努力の必要なこと，そしてその実践，そういう文学教育現象に対しては参会者全員が共通理解をもっていると思われたが，その意識を具体的な教材研究の中でどう盛り込むかということになると，文学教育観やそれを支える文学観の相違が問題になり始める。従って，教育効果の評価も一通りではなくなってくる。

藤掛氏は，作者が書いた原主題と読者が読み取る私主題の他に，教授者がもつべき公主題が存在するとの仮説に立つ文学教育観を基本とされた。その教材が，著名な作品であれば公主題が存在するかも知れないが，そうでない場合はどうなのか。また，一教材を三通りに読むということは，言語表現の読解として正しいのであろうか，という疑問点があった。

中井氏は，生徒の日常性から出発して，書くことにより思考力を伸ばす，その素材に文学作品を使用するという文学教育の在り方を実践された。文学で教育する文学教育観のうち，指導目標の抽象的思考法の好例が当の文学教材自体に存在している，適切な作品の指導報告である。この実践が，そのまま他の作品教材や生徒集団に応用できるかどうかである。

市川氏は，評価が定まっている上に，限定されている古典文学作品教材を教えるという文学教育における問題点を指摘された。とかく知識の詰め込みになりがちな学習指導の方法を改善することにより，一定の水準にまで生徒の文学的理解力を高めておこうとする授業の様子が想像される提言である。古語や古文の語学的文学教育に終らない，芭蕉の教え方である。

三氏を比較してみると，藤掛氏は文学作品の高度な読みを問題とされ，中井氏は平均的な読み方によって「棒」という難解な作品に正面から取り組む実践をされ，市川氏は文学教育入門期の学習指導上の留意点について提言されたのである。

このような相違点のあることが明確になっていったことが，今度のシンポジウムの最も大きな成果であった。

そして，今私が思うのは，相違の由来する根源となっている文学教育観を明らかにし，それらを類型化すること，そして，その中から最適な文学教育観をその都度その都度取り出して，文学教材を学習指導していくのが理想だと思うのである。今の高校国語科における文学教育は，そういう姿でなければ成立しないという確信をもつに至ったのが収穫であった。

シンポジウムでは，実際的な状況を踏まえた話し合いが中心であった。相違の目立つ文学教育観がいかにして生成するかという類の発言は，当然ながら，皆無である。しかるに，暗黙の諒解として，教材研究やその基盤である文学研究から生成すると多くの人が考えているらしいことは，「教材研究と文学研究」という主題設定からも推測できるように思う。

シンポジウムのテーマのもつ意義を，そこまで討議し合うことはできなかった。なお，司会用資料にく資料2〉として掲げた，詩教材一覧表を添えておいたのは，私個人にとって，教科書教材を成立させている文学教育観を探究することも教材研究であると同時に文学研究であるとの主張のつもりであった。

シンポジウムの司会は始めてであったが，提言発表が対極的で徹底していて，会が盛り上ったという実感があった。

Ⅳ　文学教育観の類型化案

国語科における文学教育観を，大きく類型化して，次の五項目にするのが妥当であろうと考える。前述した，シンポジウムも含む私の国語科教育研究等を総合して得た試案である。

(1)　言語生活様式や言語表現形式の教育に対し，文章教材に表現されている内容を正しく読み取る教育を意味する基礎的文学教育。

(2)　言語活動能力や言語理解能力を高める教育の環として，文学教材を読むという領域を言語教育の延長に置いて考える文学教育。

(3)　文学というものを教養の構成要件として教えようとする教育で，古典と言うことができる文学作品を知的理解しながら読む文学教育。

(4)　個々の生徒の精神の伸長を助ける目的で，人間形成に役立つ種々な生き方を扱った，評価の一定したと思われる文学教材で教える文学教育。

(5)　将来の社会やそこに生きる人間の理想像を設定しておいて，それに合致する文学教材を選定して教え，現状変革を期待する文学教育。

以上である。これらの詳細は，次回の研究論文としてまとめる予定である。

〈付言〉

56年度名大国語国文学会の公開シンポジウムに参加の機会を与えられたこと，後藤重郎先生・山下宏明先生のご指導を得られたこと，シンポジウムに関して多くの方々からご助言をいただいたことに感謝しています。

〈資料2〉「国語Ⅰ」教科書（13社17種）詩教材一覧

	生	没	収載数	
島崎　藤村	明　5～	昭18	3	小諸なる古城のほとり
高村光太郎	16～	31	9	レモン哀歌　鮟　ぼろぼろな駝鳥　晴れゆく空　苛察　樹下の二人
萩原朔太郎	19～	17	1	地面の底の病気の顔
室生　犀星	22～	37	7	小景異情　寂しき春　蝉頃　かもめ
宮沢　賢治	29～	8	4	永訣の朝　くらかけ山の雪　曠原淑女
三好　達治	33～	39	6	郷愁　甃の上　信号　土
村野　四郎	34～	50	1	鉄棒
中野　重治	35～	54	2	垣根にそうて　歌
草野　心平	36～		5	富士山　作品第肆　青イ花　ぐりまの死　蛇祭り行進
伊東　静雄	39～	28	2	夏の終わり　夕映
中原　中也	40～	12	4	一つのメルヘン
立原　道造	大　3～	14	1	眠りの誘ひ
黒田　三郎	8～	55	1	九月の風
安西　　均	8～		1	新しい刃
鮎川　信夫	9～		1	逃げるボールを追って
石垣　りん	9～		2	空をかついで　シジミ
茨木のり子	15～		4	はじめての町　わたしが一番きれいだったとき　六月　根府川の海
金井　　直	15～		1	散る日
吉野　　弘	15～		3	雪の日に　素直な疑問符　I was born
川崎　　洋	昭　5～		1	はくちょう
谷川俊太郎	6～		2	ネロ　二十億年の孤独
吉原　幸子	7～		2	鳥よ　これから

（**考察** 文学教育観の類型3を基準とし，時として2ないし4による選定と思われる。）

〈資料3〉　「国語Ⅰ」（57年度使用）教科書　13社17種ジャンル別分量比較（ページ数の比率で示してあります）

椙山大　武山隆昭氏　作成

分野	現代文							表現（一般的言語事項）	古文					漢文					ページ数計
ジャンル／教科書	小説（小説論）	詩（詩論）	短歌俳句（同鑑賞法）	随筆随想日記紀行	評論論説（講演）	説明記録報告手紙	戯曲その他（社説文集）		入門（古典言語事項）	和歌歌謡	俳諧	日記随筆紀行	物語	入門（漢文法故事成語）	詩	史伝	思想	その他	
明治「基本一」	27.8	3.5	3.1	9.8	12.9	12.9	6.7	3.5	4.3	5.1		6.7	6.3	3.5	3.5	5.1			255
尚学「国語一」	26.1	5.1	7.4	10.5	17.1	4.3		3.1	3.1	2.3	0.8	5.5	3.5	3.5	3.9	2.0	2.0		257
角川「総合一」	25.9	6.6	4.0	5.5	9.5	8.4	4.8	7.3	1.8	4.0		4.4	6.2	3.6	2.2	1.8	2.6	2.6	275
尚学「新選一」	24.4	4.7	8.2	11.8	11.1			7.5		3.6		3.6	7.5	4.3	3.2	3.2	2.5	0.7	279
教育出版	23.1	3.4	3.0	6.0	15.2		4.5	15.6	2.6	2.6	1.9	3.7	6.7	6.7	2.6		2.6		269
第一「国語一」	21.7	7.0	2.1	11.6	17.5			7.0	6.3		1.4	4.9	6.3	6.3	2.1	3.5	2.1		285
学校図書	21.1	6.7	3.3	12.2	15.6		3.7	6.7	3.7	4.8			7.8	4.8	3.7	7.8			270
明治「精選一」	21.0	2.8	2.8	13.1	10.0	5.2	5.2	11.7		3.8		7.2	6.9	2.1	3.1		4.5		291
大修館	20.1	4.3	2.7	7.3	30.9			3.5	5.8	3.9		5.4	3.9	5.0	2.7		3.9		259
東京書籍	19.2	3.9		11.7	22.7			4.6	5.7	3.6		6.7	10.6	3.6	2.1	0.7	3.6	1.4	282
三省堂	19.9	4.2		14.7	11.2			21.0		3.5		4.9	9.4		2.8	4.9		3.7	286
第一「新国語一」	18.4	6.0	5.6	12.8	20.4	3.6		9.2	4.0			6.0	5.2	6.0	2.8				250
筑摩書房	18.2	4.1	5.2	17.9	26.4			2.8	5.5	2.4		5.2	7.6	1.0	3.4	3.1			291
旺文社	18.2	5.1	2.1	14.0	27.4			1.7		1.4	1.4	5.8	12.3	1.7	5.1	3.8			292
角川「精選一」	18.2	3.5	3.5	12.8	8.4	12.3		11.3	2.5			2.5	10.8	5.4	4.4	2.5	2.0		203
右文書院	18.1	2.3	3.3	5.0	19.1			13.7	1.7	3.0	1.3	9.7	5.0	4.4	4.0	3.3	2.7	2.7	299
光村図書	17.0	3.3		8.3	24.2	3.3		11.9	3.3	2.9	1.1	5.4	6.5	5.1	2.9	2.9	2.2		277
平均	21.0	4.5	3.3	10.9	17.6	2.4	1.1	8.4	2.8	2.8	0.5	5.4	7.2	3.9	3.2	2.5	1.8	0.7	4,619

（考察 教科書教材を分野別に比較すると，その約半分が文学教材である。非文学教材は1／3，表現・言語教材は1／6である。）